於いて先生が、新出の龜甲文字や銅器銘文などの資料を驅使し、考證學的方法と先生獨特の史眼で傳說時代の支那再確認に非常な自信と興味とを持たれたことは事實である。富永仲基の佛教史研究法に共鳴して支那古代傳說の加上を論じ、年代的五帝を空間的五帝に還元せしめられた所などは動かすべからざる鐵案であり、今後の支那古代史研究の出發點とせねばならぬであらう。

清朝史通論は近世史である丈に、一際强く先生のポリチイクが現はれてゐる。ポリチイクは兎角上辷りに流れたり、學問と分裂したりしたがるものであるが、先生のそれは、此處が經世の論だと別にことわらないでも隨所にそれが滲み出てゐる。ある會社の重役が毎日資治通鑑を一卷づつ讀むといふ話を聞いて先生が、それは偉い、金儲の參考に出來るやうなのが本當の通鑑の讀み方だと賞められたことを憶えてゐる。先生のこの書も、讀み樣によつては、學者以外の人にも經世處身の虎の卷になるかも知れない。

先生は度々支那へも行かれ、清國學者との交際も廣く、又藏書にも富んで居られたので、清朝史通論に盛られた材料は恐ろしく豐富であり、それが殆ど皆先生の手許にあるか又は實地に目過されたものに係つてゐる。特に清代の書簡などを多く觀られた點では、恐らく先生は當時の日本に於いて一二を爭ふであらう。音韻學だの考勘學だの、さては文章詞曲など、取りつき憎い難問題が一度先生の手に掛ると平易に嚙み碎いて明快な說明が與へられてゐる。文化史的な內容が大部分を占めてゐるから、寧ろ清代文化史と云つてよいかも知れぬが、抑も歷史と云ふものが別に文化史と名乘らぬでも、斯ういふ風にするのが本當だとも云へる。先生の書は、何時出ても、今書いたばかりかと思はれる清新さがあり、更に色々なことを考へさせる不思議な力を持つてゐる。(宮崎市定)

西域史研究(上・下卷)

白鳥庫吉著

昭和十六年九月・同十九年四月
岩波書店刊行　A5版通計一五〇五頁

明治以後に於ける本邦史學史を顧るに、西域史研究も亦、新學問の一たるを失はぬ。而してこの新科學の創始者こそ白鳥庫吉博士にして、博士の最も得意とせらるる部門であり、殊に其の初期にありては博士以外には殆んど企て得ざりしものであつた。尤も當時に於いても博士以外に西域史研究に携りし人々は皆無ではなく、那珂通世博士・三宅米吉博士等の諸業績を逸することは出來ないけれど、眞の意味に於ける西域史研究は實に白鳥博士を以て其の權輿とせねばならぬ。

博士の西域史研究途上に於ける最初の論文は「烏孫に就いての考」(明治三十三—四年、史學雜誌十一編十一號、十二

編一・二號）にして、今回、本も上卷の冒頭に掲げられたのは其の當を得たものであらう。次いで博士は外國留學より歸朝後、大秦國に關する新見解「大秦國及び拂菻國に就きて」（史學雜誌十五編四—十一號、本書下卷所收）を提出されて Friedrich Hirth の所說（China and the Roman Orient）を批判せられ、引續いて西域史研究に潛心せられたる結果、物されたのが明治四十四年より大正二年に亘り東洋學報（一卷三號、二卷一號、三卷一・二號）に連載されし「西域史上の新研究」（本書上卷所收）に他ならない。西域史學の開拓者としての博士の意氣の程は本篇の序文にも窺ひ得るが、其の中、「康居考」に於いては漢代の康居がキルギス・ステップを指すものにして、西人の說く如く Sogdiana の地を指すものに非ざることを指摘され、大月氏五翕侯の位置・彊域を中心に論ぜられし「太月氏考」にては Marquart の所論に批判を加へられたのである。更に大正五年より引續いて研究成果の發表を見た。先づ、「大宛國考」（大正五年二月、東洋學報六卷一號、本書上卷所收）は、主として漢代の大宛、殊に其の都城貴山城の位置を論じて Khojend 比定說を排せられ、（之は桑原隲藏博士との間に熾烈なる論戰を展開されることとなつた。桑原博士「東西交通史論叢」參照）大宛の名義に就いて音譯說を唱へられ、翌六年一月發表せられし「罽賓國考」（東洋學報七卷一號、本書上卷所收）に於いては、漢代の罽賓卽 Kashmir 說（Ed. Chavannes, S. Lévi）を批判して、其の實は Gandhara 地方を指すものなることを論證せられたが、更に同年九月より翌々年に亘つて公けにされし「塞民族考」（東洋學報七卷三號、八卷三號、九卷三號、本書上卷所收）にては、西方史料（Herodotus 及び Behistan 碑文以來の）日見のサカ族と漢代史料に見える塞種との關係を詳論されたのである。本書上卷には以上の他に猶、「大宛國の汗血馬」（明治三十九年八月、東亞之光一卷四號）「佛教東漸の傳說」（昭和十年五月、「佛教講話」所收）を收めてゐる。

本書下卷の排列は「プトレマイオスに見えたる葱嶺通過路に就いて」（昭和十六年四月、蒙古學報第二號）「粟特國考」（大正十三年十二月、東洋學報十四卷四號）の中亞研究二篇を冒頭に掲げたる後、「大秦國及び拂菻國に就きて」（前述）「條支國考」（大正十五年五月、「內藤博士還曆祝賀支那學論叢」所收）・「大秦傳に現はれたる支那思想」（昭和六年一月「桑原博士還曆記念東洋史論叢」所收）・「大秦傳より見たる西域の地理」（昭和六年四—八月、史學雜誌四二編四・五・六・八號）・「拂菻問題の新解釋」（昭和六年十二月・七年七月、東洋學報十九卷三號・二〇卷一號）・「大秦の木難珠と印度の如意珠」（昭和八年八月、「市村博士古稀記念東洋史論叢」所收）など西亞關係の諸研究六篇を載せてゐる。「粟特國考」は久しく難問たりしこの國の所在を考へられた結果、それが後漢書の栗弋（粟弋）にして南北朝の昭武九（六）姓

諸國、隋唐の康・米・曹・安・史・何などソグディアナ諸國を包含し、佛典の窒利國に當ることを證せられたるもの。「條支國考」にては條支國がチグリス、ユーフラテス兩河のデルタを本地とするMesene-Kharacene國にして、條支の字面はメソポタミヤの指稱たるセミチック語ヂェジラの音譯なることを說かれた。昭和六年、史學雜誌に連載せられし「大秦傳より見たる西域の地理」においては大秦傳所記の地理を考證され、最後に條支國と大秦國に關する記事の再檢討を試みられた結果、條支は Antioehia の略譯と解せられて前說を改訂せられたのである。（なほ條支の地は宮崎市定教授により Syria, Seleucia に比定されて居り—史林二四卷一號所載「條支と大秦と西海」—、夙に小川琢治博士は「支那歷史地理研究初集」第十二章「歷史地理の地名學的研究」に於いて、條支を Antiochia の音譯として Syria に比定されてゐる）「大秦傳に現れたる支那思想」は大秦傳の成立と漢代思想との關關を論ぜられて、大秦の文字解釋に及ばれしもの、考古の上に示唆せらるゝ所多い。「拂菻問題の新解釋」は上・中・下三篇より成るが、本卷に收むる所は上・中兩篇であり、本年一月發行の東洋學報二九卷三・四合冊號に載せられた下篇を以て完結するのである。魏書大秦傳の批判に始りし本論文は、拂菻國號の解釋より進んで魏書の伏盧尼國が隋唐時代の拂菻國にして、其の都城伏盧尼城は Antiochia なりと比定せられたに續けて、隋唐時代の拂菻國、南朝の記錄所見の拂國の檢討に及ばれてゐる。本論文に於いては、嘗て B. Laufer に依つて問題とされし水羊傳說は更に一段と解釋を深められてゐるのであつて、民俗學的研究としても極めて卓れたものとせねばならない。博士の民俗學的方法は西域史研究に於いては更に「大秦の木難珠と印度の如意珠」を見るに至つた。卽ち、通典大秦國條所見の木難珠を取上げられ、同書同條の內容の分析解釋を行はれた後、木難珠の實體を突止められ、更に寶珠說話の問題へと進まれる。印度の如意珠も檢討の對象となるのであり、更には祚答石・淡薩石の靈驗・石信仰の問題に及ばれたのである。（なほ博士には「岩石信仰の起源」民族學研究二卷二號がある）

以上、本書上下兩卷に收められし諸論文は博士の西域史研究の成果を悉く網羅したものではないが、其の主要なるものは茲に集められたと云つて宜い。更に上卷に於いては、後出論文にて前出論文の所說を改められし場合、前出論文の該當條下に其事の註記がなされてゐるのは、編纂者各位の御發案になるものとして推すべきであるが、豫定せられし附圖索引の附せられなかつたのは—現下のこととて止むを得ぬとは云ひ乍ら—誠に遺憾事であり、何等かの形で補はれ、以て本書を完璧のものたらしめられんことを期待したい。博士の西域史研究の諸業績に就いては今更乍ら讃うるに其の辭を得ないのであるが、最後に、博士の東洋史論集の編纂に携はれる方方の御努力に敬意を表して筆を措く。（岡崎精郎）